ほんとうのこころ

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ほんとうのこころ

【Ｎコード】
Ｎ６２３５Ｚ

【作者名】
鈴蘭

【あらすじ】
「新一なんか…大嫌い！！！」
私が言ったこの言葉で新一との関係が崩れてしまう…
新一、私は今でも、あなたのことが大好きです…
「もう顔も見たくないんじゃねーの？」
新一カラ告げられたこの言葉。ー新一のばかー
「新一は、山城さんのほうが好きなんでしょ？」「俺は・・」「工藤君、あなた、変な意地張ってんじゃないわよ！」「元の蘭を帰してよ！」「私は…工藤君とは無関係よ、ただ、あなたがかかわる問

題じゃないの…！」「私と工藤君は恋愛関係じゃ…」

「うそよお！」

はたして、新一と蘭の恋の結末は！？

喧嘩

「新一のばか…」
蘭は半泣きでいつもの帰り道を歩いていた。
新一と蘭が付き合って二カ月がすぎる。
いまだに喧嘩はあるようだが、蘭が泣くまでひどいことはなかった。
それは、一時間ほど前のことだった。

「おい、ら・・・」
新一と蘭は違うクラス。
蘭はA組。新一はB組。
新一が彼女の蘭を呼びに行こうとした時、同じクラスにいた、新一と肩を並べるほどのイケメンで優しい男子と蘭が仲良く話していたのを新一は見てしまった。
その男子は蘭と話している時だけうれしそうに顔を赤くしているのだ。

「へぇ～・・・すごいね！」
「あ、そうだ、今度行こうよ！そのサーカス！日曜日にさ！」

「あ、日曜はだめ。新一と…」
「いいってそんなの！」
「でも…」
「いいからいい・・・か・・・ら・・・！！！」
その男子がふと、ドアのほうを見ると、新一がものすごい剣幕で男子を見蘭でいた。

「あ、新一！」
「よう、蘭。何の話してたんだぁ？」
何か意味ありげな顔をして蘭に聞く。
「なんか、サーカス行かないかないかって。」
「断ったんだろうな？」
「うん…」
蘭は何か不安げな顔をする。
「どうした？」
「空手が…」
「あ、もしかして、大会なんか？」
「うん…近いから、合宿しないかって。」
蘭は心配そうな悲しそうな顔をした。
新一が起こるであろう、そう思ったのだ。
「なんだ、そうだったのか。実は、俺も用事があったんだ。」
「え…？」
「工藤君！」
「あ、山城。」
山城優未が蘭の目の前に現れた。優実は、ツインテールで美少女である。

「山城さん…。」
「工藤君、日曜のこと、忘れないでよ！？なんたって、あれは…」

「シッ！」
新一が急いで優実の口をふさぐ。蘭はそれを不審に思った。
「新一…山城さんと行くんだ。ふぅん…デート？」
「あ、違うって…。」
「そうよね、なんなら、別れようよ。私なんかより、山城さんのほうがいいんでしょ？」
蘭はうつむきながら言った。
新一はあわてていたがどうしようもできなかった。

「蘭…違うって…！」

「新一のばかぁッ！！

新一なんか…新一なんか…大嫌い！！！！！！」

蘭はそういうなり、走って学校を出て行ってしまった。

自分の心

日曜日、私は自分の部屋で泣いていた。
新一とは別れた・・・っていうの？
本当は本当は、別れたくなんかない、嫌いじゃない。

大好きでずっと一緒にいたい。
でも、新一は…山城さんと今日、デート。
2人でどこに行くんだろう…
映画？
ショッピング？
公園？
それとも、
私と新一がよく行った、トロピカルランド？

あぁ、トロピカルランド…1人でもいい。行ってみたい。
久しぶりに…。

新一は、私ではなく、山城さんを選んだ。
まぁ、当たり前。私なんかより、可愛げがあって、女の子らしくて。
空手をやっている野蛮な私なんかよりも、すっごく可愛い。私は、
ブサイクで優しくなんかない。
いつも新一のせいばかりして。

だから新一も飽きちゃったんだよね？

私がばかだから…

私は不細工だから…

私がいけないから…

「おい、蘭！」

お父さんの声…。

「探偵坊主が来たぞ～！」

探偵…坊主…？

新一…！！！

私は急いで行こうとした。でも、急に足が止まった。

怖い・・・

新一にあんなこと言って・・・

どうせ、別れよう、とでも言うんでしょう？
私はそのまま部屋から出ようとは思わなかった。

「帰って！」
私はそう叫んだ。
「毛利さん！」
山城さん…のこえ。

やっぱりいたんだ。
「おい、探偵坊主、そいつは誰だ！？」
「は～い、山城優実です！工藤君の友達というか、彼女というか？」
「ちがうだろ。」
「はぁ？おまえの彼女は蘭だろうが！？」
「あ、そのことで…」
え…
やっぱり別れようって…

新一のばか…

私、恥ずかしいじゃない。
あんなに、あんなに、新一と一緒にいたことが…。

「帰ってよ！もう…かおもみたくない！！！！」

あ、いっちゃった。

どうしよう…

私は急いでドアを開けて、玄関へ向かった。

そこには、新一と山城さんが帰ろうとしていた。

「ま、待って…！！！」

私は二人を追いかけた。

2人は振り向く。

「ごめんなさ…」

「顔も見たくないんじゃねーの？」

し、新一…？

「お前、俺のこと嫌いなら…

別れるか？」

自分の心（後書き）

新一…！

とうとういってしまった！？

家族関係

「新一？」
「蘭、おまえは俺と別れたいのか？」
「そんなことない！ただ…イラついてたの…ゴメンナサイ・・・」
どうして？どうしてここまで私が苦しい思いを？
新一じゃないみたい…。
「いや、別にいいんだ。」
「新一、山城さんとどこへ？」

「どこだっていいだろ？」
「何よ…それ…」
「蘭には関係・・」
「あるわよ！新一、新一のほうこそ、私と別れたいんでしょ！？なんなら、

別れてあげようじゃない！じゃぁね、新一！」

バカ…何言ってんのよ…

「おい、蘭！」
新一が私を呼んでる…

でも、私は振り返ることができなかった。
いや、しようと思わなかった。

「毛利さん！待って！話があるの！」

どうせ、新一をくださいとでも言うんでしょ？

いいわよ…別に…？

「何？話って。」

「毛利さん、私、工藤君とは恋愛関係じゃ…」

「嘘よ！！」

「毛利さん…？」

「私がこんな思いをしてるのは…山城さんがいたから…っ！」

「毛利さん、そのことはゴメンナサイ・・・！でも…私は工藤君とは無関係です…いや、家族関係ですね…。」

「家族関係？」

「そうです。だから・・・私は…工藤君のことは好きじゃないです！！」

「本当…？」

「そうです！」

ほっとした…

でも、どうしよう、これから…

どうせ、新一は怒ってる。

ごめんね、新一。

「毛利さん、私、応援しますよ？私、一応、毛利さんファンですから！」

「ありがとう…」

私は泣いていた。ごめんね、新一。

私は急いで、志保にメールした。

『Ｔｏ志保
いきなりごめん。
じつは、今さっき新一と別れてしまったの。原因は私。
どうしたらいいと思う？
園子にもメールしとく。志保の意見聴かせて…！』

こう打つとすぐに送信した。

そして、数分すると、返信が来た。

『Ｔｏ蘭
はぁ？工藤君と別れた？
どうして？まぁ、それは工藤君に聞くわね。
工藤君はＡＰＴＸ４８６９で脅せばスラスラとはいてくれるわ。』

アハハ・・・志保らしいな…

よぉし次は園子！
『Ｔｏ園子

今さっき、新一と別れちゃった。どうしたらいい？
原因は私なの。「顔も見たくない」っていったら、なんだか、新一めちゃくちゃ怒って謝ったら、新一、こそこそと山城さんと出かけようとしたの。でも、山城さんは新一のこと好きじゃないって。新一は…山城さんとは家族関係らしいの。何のこと話してたかわからないけど、でもでも、私は新一のこと好き。どうしたらいいとおもう！？』

送信送信っと。

数分後、

『Ｔｏ蘭
はぁぁぁぁぁぁ！？新一君と別れたぁ！？
ぬぁにやってんのよ！あんたたち、付き合って約二カ月じゃない！
わかったわ、新一君に問い詰めるわね！志保と共同で！蘭、あんまり凹まないでね！』
園子…

いい親友を持ったなぁ…今頃だけど。

でも、ありがとう、２人とも。

家族関係（後書き）

どうなるの！？2人ぃ！
感想待ってます。

相談

新一と別れてはや一カ月。あーあ、あのままだと、二か月と半分だった。
「蘭…ほかの男見つければ？」
「園子、私は…」
「蘭の気持ちはわかってる。でも、蘭、あなたはいつも新一君のことばかり。あなたからふっちゃったくせに…。」
「私もカッとなっちゃったの。新一が山城さんと秘密にどこか行こうとするから…。私のことを差し置いていたから…。そう、全部新一のせいにしちゃうから。だから、いけないのよね…」
私はカフェで園子と相談していた。
園子の発言に私はなんとなく気が乗った。
「いい男のねぇ…」
予想してみる。
でも、でてくるの新一の顔ばかり。
「駄目、全然タイプが…」
「やっぱ、新一君かぁ…」
私には、新一しか駄目みたい。
「蘭、合コンいこ！今、やってるから！」
カフェからみえる、「合コンやってます」と書かれた看板を2人で見る。
私は仕方なく行ってみた。
店の中ではなんと、女子群は蘭のバイト友達がいた。
「蘭ちゃんじゃない！？」
「あら、毛利さん！どうしてここに！？」
「ちょっと、訳があって。あ、そうだ、いいかな、入っても。」
「もち！」
「あ、この子は園子といって、私の大親友よ。」

「よろしく！」
こうして、私は合コンに入って行った。
「ねぇ蘭ちゃん！今日の男子軍、ちょう、やばい人がいるのよ！」
バイト仲間の一人がこう言った。
誰だろ？カッコいいのかな？
「よぉ、待たせましたぁ～！」
あ、男子群が入ってきた。
「おい、～～入ってこいよ！」
「いいって！てか、俺は…」
え…？聞き覚えのあるような…
私と園子は顔を見合わせた。
「きゃぁ～！工藤君！」

え…？新一！？

再会

「し、新一…？」
「新一君…？」
「ら、蘭…！？」

三人で驚いていた。
私は、その場から逃げだしたくて仕方なかった。

「ちょっと、毛利さん、あなた、工藤君の知り合い？」
「あ、その…」
「蘭は新一君の彼女よ！」
「はぁ！？」
「えええええ！！？」
「なんで！？」
私まで驚いた。
私がフッタのに…
「じゃぁ、何で合コンなんかきてるのよ！工藤君も！」
「単なる、私が付き合わせただけ！きっと新一君もそうに違いないわ！」
「あ、あぁ…」
「ちょっと、園子！私は、新一と…！」
「いいのよ、蘭！これは、チャンス。いいじゃない！」
園子のチャンスは見逃すはずない。
でも、私は…

新一にひどいことを言ったの。
だから、私は罪びとなの…。

お願い…やめて・・・

新一の彼女って言う資格なんかないの…！

そう思ったとたん、私は逃げ出していた。
園子と新一が私を呼んでいた。

でも、それよりも、私は、逃げ出したくて、新一と一緒にいたいくせに、怖い気持ちを優先させてしまった。

バカな私…

「蘭！！！！」

新一の声がする。

呼ばないで！

私の名前を…

呼ばないでよぉ！！

「蘭！！」

ガシッと音を立てて、私の腕をつかんだ新一。
「いや！離して！」
「蘭、俺は…」
「いや！」
「俺は、蘭を

一生守りぬき、愛を誓います…！」

え…？今…

なんて言った？

愛を誓います？

一生守りぬきます？

どうして新一はこんなにやさしいんだろう？

私がこんなにひどいことを言っているのに新一は広い心で受け止めてくれる。

私は、このとき、一番幸せだと思った。

「私…」

私の頬に一筋の涙が通った。

それを見て、新一があわてだした。

「あ、ごめん…いやだったか？それとも、痛いか？」

ううん…

ありがとう…

そう言いたい。

でも、嬉しすぎて嬉しすぎてどうも言えない。

「とにかく、俺んちに行くぞ。」
新一が優しくそういうと私の手を優しく包んで引いて行った。
新一の家に来たのは一カ月ぶり。
新一に家の匂いだ…
「それで？返事は？」
「バカ・・・ッ決まってるじゃない…！
私…ッもッ一生愛を誓います…っ」
言えた・・・
やっと言えた・・

「よかった。」
そういうと同時に新一と私の影は一つとなった。
私は二度目の幸せを感じる・・・。

再会（後書き）

そろそろ終わり…
なんていう、早い話なんでしょう?!
ソウイエバ、新一、優実ちゃんとなにをこそこそ出かけようとしたんでしょ?
それは、次回に!
感想待ってます!

Merry Christmas！（前書き）

最終回です！
短いお話に付き合ってくださり、ありがとうございます！

Merry Christmas!

今日はクリスマス。
仲間、友人、家族、そして、恋人が楽しい夜を過ごす日。
聖夜では楽しめなかったことでも楽しめる特別な日。

「メリークリスマス、新一。」
再度、付き合うことになって一週間。
園子の喜びの言葉もあり、小五郎のうれしさと悲しさの言葉があり、新一は小五郎から一本背負いという痛いクリスマスプレゼントをもらい、蘭は新一からもらった婚約指輪をしてトロピカルランドへ行き…

そうして、クリスマスという、短い時間は過ぎて行った。

クリスマス終了まであと5時間。
「新一、私…いまとても幸せ。」
「なんで？」
「大好きな人大切な時間を過ごせるからね。」
「あぁ…そうだな…」
「あら、なんかつまらなそうだけど…」
蘭ではない声が後ろから聞こえてきた。
「し、志保！」
立っていたのは宮野志保。

志保は薬のようなものが入った瓶を片手にコツコツとこちらにやってきた。
「なんだぁ？」
「これ、蘭さんに。」
「え…？薬…？いや…カプセルかな？」
「まぁ、そんなところね。」
「なんだよ…」
「これ、ＡＰＴＸ４８６９。」
「え！？」
「はぁ！？」
志保の言葉に新一と蘭は驚いた。
なにせ、あの薬なのだから。
「大丈夫。ちゃんと解毒剤はあるわ。」
「そういう問題じゃねーだろ！？」
「蘭さん、工藤君にかわいがられるわね。いちおう、あなたのために作ったのよ？」
「は？」
「工藤君が子供のお世話をできるかどうかの実験よ。蘭さん、意見はあるかしら？」
「う～ん…新一、わたしが子供だと思うと何にもしないと思う。」
蘭の言葉に志保はふっと笑いがこぼれた。
「馬鹿ね、このＡＰＴＸ４８６９と同時にこっちの薬も飲ませるつもりよ？」
「何…これ。」
「名前は決まってないけど、蘭さんを蘭さんとは思わない薬、とでもいえば簡単かしら？」
「これを、新一に飲ませるんだ…」
「そういうこと。」
志保からもらった薬二錠を蘭は受け取り、新一に片方を渡した。名無しの薬を。

蘭はＡＰＴＸ４８６９を一気に飲んだ。

（体が…熱い…何…これ…？）

数時間後、蘭が戻ってきた。
新一は蘭のほうを向くと、
「俺の…妹？」
といった。
「え？」
新一はおかしなことを言っていると思い、志保は理解できなかった。
本来であらば、新一は「子供」というはずが自分の妹と理解してしまったのである。
志保の失敗…

その瞬間、志保が蘭に薬を飲ませた。
「う…っ」
予定してなかったことにより、何もできず薬が体内へと行ってしまった。

また数時間後、蘭は目覚めるとそこには新一が立っていた。
「お兄ちゃん？」
「え？」
志保は蘭の言葉に驚きを隠せなかった。

本来であらば、「お父さん？」と呼ぶはずだったのが、新一と同じく、兄妹だと思い込んでしまったようだった…これもまた、失敗だ

ったらしい。
薬が切れるのは一か月後、二人の運命はどうなるか…？
初めのプロローグ。
二人を…周りはどう受け止めるのか…

Merry Christmas！（後書き）

終わりました。
続編あったら見てくださいね！
感想待ってます！

プチトーク

続編を書く前の新一と蘭のプチトーク

蘭「お兄ちゃんっていうの？」
新「らしいな」
蘭「新一が弟のほうがよかった」
新「俺も～、蘭に甘えられる。」
蘭「馬鹿」
新「作者～変えて」
鈴「いやです。このほうがいいかと思うよ？だめだめな新一お兄さんをよろしくね、蘭ちゃん！」
蘭「そうだね…新一、私がいなくちゃ何もできないもん。」
新「うるさい」
鈴・蘭「あんたが言えることじゃない」
新「すみません」
鈴・蘭「よろしい」
蘭「にしても、私、新一に小さいころの顔見せるのかぁ…」
鈴「なにか、ご不満でも？」
蘭「だって、不細工ジャン」
新・鈴「はぁ？」
蘭「誰が見たって不細工よ」
新「バーカ、お前はなぁ」
鈴「すっごくかわいいのわからないの？性格もよし、顔もよし、名探偵がベタ惚れ。いいことだらけじゃん」
蘭「そんなにいい？」

鈴「もち！」
新「俺のセリフとるなよ…」
鈴「いいじゃんか。あんたたち二人ならいつだって言えるじゃないか」
新「ヘイヘイ」
鈴「返事は一回ときちんとすること。」
新「そうでした。」
蘭「新一、本当にだらしない。」
新「うるさい」
鈴・蘭「あんたが言えることじゃない」
新「すみません」
鈴・蘭「よろしい」
新「これ、さっきも言わなかったか？」
鈴「いったかもね。」
蘭「いった言った」
鈴「ていうか、いつまで・・・」
新「なぁ、蘭。これから三ツ星レストランでもいかねーか？」
蘭「道楽息子」
新「うっせ。」
蘭「まぁ、いっか！よし、行こう！」
新「ＯＫ！いこうぜ！」
鈴「私…忘れられた？」
蘭「じゃぁね、作者さん！」

あ、よかった。忘れられてなかった…カナ？

皆さん、続編をお楽しみに！

プチトーク（後書き）

感想待ってます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6235z/

ほんとうのこころ

2011年12月25日19時00分発行